## ユンヌフトゥバ劇に関するアンケート調査結果の分析

石原昌英

## 1. はじめに

2017 年 11 月 24 日に鹿児島県与論町の総合体育館砂美地来館(さびちらかん)において、ユンヌフトゥバ(与論方言)劇『もうひとつの按司根津栄伝説』(坂田哲平作)が上演された。按司根津栄(アジニッチェ)は与論町民の殆どが知っている伝説上の人物である。劇では、現代の若者達が按司根津栄が生きていた時代にタイムスリップして物語が進行し、現代の若者達は日本語を話し、按司根津栄を含め昔の与論島の人びとはユンヌフトゥバを話す。

プロの劇団の指導を受け、与論町民が演者とした参加したユンヌフトゥバ劇について、 観客がどう評価したのかを知る目的でアンケート調査を実施した¹。アンケートでは下記の 質問をした。

- 1. 貴方は与論町の出身ですか。
- 2. 貴方の年齢は何歳代ですか。
- 3. 貴方はユンヌフトゥバをどの程度話せますか。
- 4. 貴方はユンヌフトゥバを聞いてどの程度理解できますか。
- 5. 貴方はどの程度ユンヌフトゥバを使用していますか。
- 6. 貴方は与論島の子ども達にユンヌフトゥバを使えるようになってほしいと思いま すか。
- 7. 貴方は今日のユンヌフトゥバ劇の内容をどの程度理解できましたか。
- 8. 貴方は今回のような住民が参加するユンヌフトゥバ劇の上演はユンヌフトゥバの保存継承に効果があると思いますか。
- 9. 質問8の回答の理由は何ですか。

以下にアンケートの質問に対する回答とその分析を述べる。

## 2. アンケート結果とその分析

まず、アンケートの回答者は 102 名で、そのうち与論町出身者が 69 名、与論町外出身者が 32 名であった (無回答者が 1 名いた)。次に、回答者の年代は表 1 の通りである。なお、年代については、1 は 7 歳~12 歳(小学生)、2 は 13 歳~15 歳(中学生)、3 は 16 歳~18 歳(高校生)、4 は 19 歳~29 歳、5 は 30 歳~39 歳、6 は 40 歳~49 歳、7 は 50 歳~59 歳、8 は 60 歳~69 歳、9 は 70 歳~79 歳、10 は 80 歳以上と区分した。 1~3 の区分は、学校レベル(小中高)に合わせた。

年代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人数	2	1	1	11	16	17	20	23	7	4

表1 アンケート回答者の年齢

表からわかるように小中高の児童生徒の観劇者は少なかった。また、19歳~29歳の観劇者も少なかった。ユンヌフトゥバの保存継承の担い手となる世代の観劇者が少ないということであるが、この世代がユンヌフトゥバに接する機会をどのようにつくっていくかは一つの課題であろう。

<sup>1</sup> 演者の評価については、前田執筆の「もう一つの『安司根津栄伝説』」を参照のこと。

質問 3 (あなたはユンヌフトゥバ (与論のことば)をどのくらい話せますか?) に対する回答の割合を図1に示した。なお、選択肢は 1 (十分に話せる)、2 (ある程度話せる) 3 (少し話せる) 4 (ほとんど話せない) 5 (まったく話せない) の5つであった。

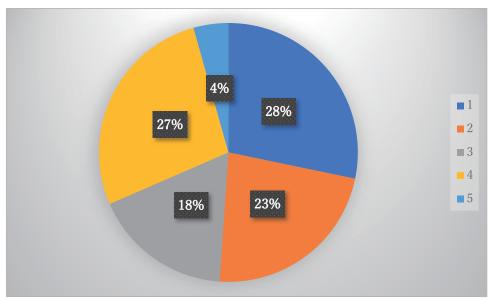


図1 ユンヌフトゥバを話す能力

「十分に話せる」「ある程度話せる」「少し話せる」と回答した者の割合は合わせて 69%であった。回答者を与論町出身者 69 人に絞ると、59 人 (86%) が「十分に話せる」「ある程度話せる」「少し話せる」と回答している。「ほとんど話せない」または「まったく話せない」と回答した者は 10 人でそのうち 30 歳代以下が 8 人であった。ここから、データとしては少ないが、与論町在住の与論町出身者でユンヌフトゥバが話せない者は 30 歳代以下の世代であると推測できる。言い換えると、40 歳代以上の人は「ある程度話せる」以上の能力を有していると推測できる。

質問 4 (あなたはユンヌフトゥバを聞いてどのていどわかりますか?) に対する回答の割合を図 2 に示した (無回答者 1 人を除く)。なお、選択肢は 1 (十分に理解できる)、2 (ある程度理解できる)、3 (少しだけ理解できる)、4 (ほとんど理解できない) 5 (まったくわからない) の 5 つであった。

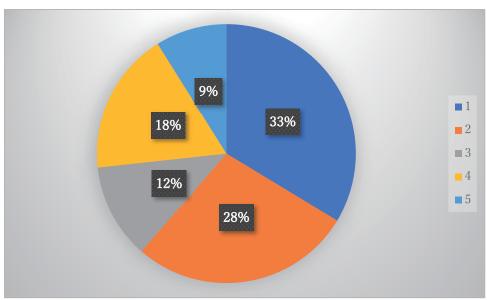


図2 ユンヌフトゥバを聞いて理解できる能力

「十分に理解できる」「ある程度理解できる」「少しだけ理解できる」と回答した者の割合は 73%であった。回答者を与論町出身者だけに絞ると、64人(93%)が「十分に理解できる」「ある程度理解できる」「少しだけ理解できる」と回答している $^2$ 。「ほとんど理解できない」「まったくわからない」と回答した者の年代は 13歳~15歳が 1人、19歳~29歳が 1人、30歳代が 2名であった。この結果から、与論町在住の与論町出身者は若い世代でもコンヌフトゥバを聞く機会があり、程度の差はあるが、聞いて理解できる能力を有していることが推測できる。質問 3 と質問 4 に対する回答を合わせて分析すると、聞けるけど話せない者(いわゆる「受動的母語話者」)が存在することがわかる。

質問 5 (あなたはユンヌフトゥバを使っていますか?) に対する回答の割合を図 3 に示した。選択肢は、1 (毎日使っている)、2 (時々使っている)、3 (使ったことがある)、4 (使う機会が無い)、5 (使ったことはない) の 5 つであった。なお、無回答者が 12 人(12%)いたが、その割合も選択肢 6 として図に含めてある。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 80 歳代に1人無回答者がいる。その人は質問3に「十分に話せる」と回答しているので、ユンヌフトゥバを聞いて十分に理解できる能力をもっていると推測できる。

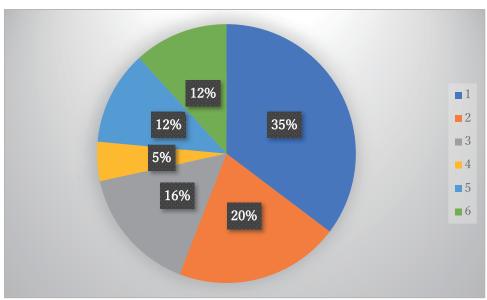


図3 ユンヌフトゥバの使用頻度

「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」と回答した者の割合は71%であった。17%が「使う機会が無い」「使ったことはない」と回答している。回答者を与論出身者69名に絞ると、55人(80%)が「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」と回答している。無回答者10人について質問3・質問4の回答を見ると、2人を除くとある程度以上の言語能力(「話せる」「聞いて理解できる」)を有していることがわかる。この8名は日常生活でユンヌフトゥバを使っていると推測はできるが、質問に無回答なので断定はできない。なお、与論町外の出身者で「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」12人で、そのうち「使ったことがある」と回答した者は11人であった。ここから、町外出身者がユンヌフトゥバを使う機会が少ないことが推測される。

質問 6 (与論島の子ども達にユンヌフトゥバを使えるようになってほしいと思いますか?) に対する回答の割合を図 4 に示した。選択肢は、1 (強くそう思う)、2 (まあそう思う) 3 (使うかどうか個人が選ぶべきだ)、4 (あまり思わない)、5 (まったく思わない)の5つであった。なお、図 4 には無回答の割合 13% (13人)を含んでいる。また、「まったく思わない」と答えた者はいなかったので図 4 から除いた。したがって、図 4 では、項目 5 は無回答者の割合である。

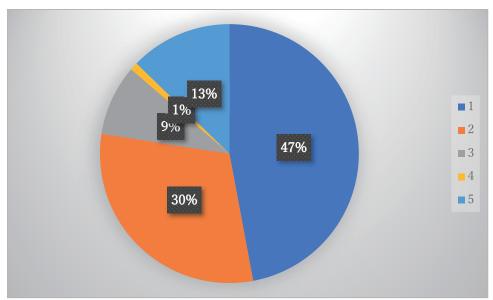


図4 与論島の子ども達がユンヌフトゥバを使えるようになってほしいか?

「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は77%であった。9%が「使うかどうか個人が選ぶべきだ」と回答している。回答者を与論町出身者69人(11人が無回答)に絞ると、「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は77%であった。なお、無回答者11人を除くと、回答者58人にしめるこの二つの選択肢のいずれかで回答した者の割合は91%であった(なお、4名が「使うかどうか個人が選ぶべきだ」と回答しているが、そのうち3名は70歳代以上の世代に属するものである。)。質問6に対する回答から、与論町在住者の多くが、子ども達がユンヌフトゥバを継承することを望んでいることが推察される。もちろん、データが極小規模であることと、観劇者はもともとユンヌフトゥバに関心があったことが推測されることを差し引いて考察する必要はある。

質問 7 (あなたは今日のユンヌフトゥバ劇の内容をどの程度理解できましたか?) に対する回答の割合を図 5 に示した。選択肢は、1 (十分に理解できた)、2 (ある程度理解できた)、3 (わかることばもあった)、4 (ほとんど理解できなかった)、5 (まったくわからなかった) の 5 つであった。なお、無解答者が 25 人と全回答者の 25%を占めるが、図 5 に加えた。

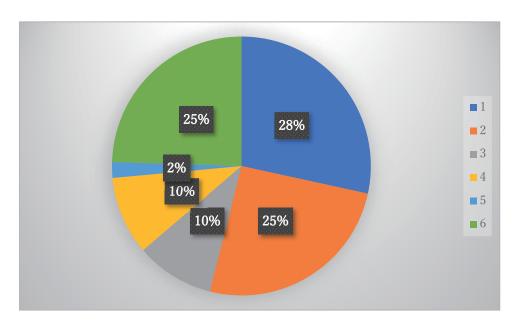


図5 ユンヌフトゥバ劇の理解度

「十分に理解できた」「ある程度理解できた」「わかることばもあった」と回答した者の割合は 63%であった。与論町出身者 69 人のうち無回答者が 23 人であった。それを除く 46 人のうち 45 人が「十分に理解できた」「ある程度理解できた」「わかることばもあった」と回答している。そのうち 1 人だけが「わかることばもあった」と答えている。また、無回答者 23 人のうち 18 人が質問 4 に対して「十分に理解できる」「またはある程度理解できる」と回答しているので、この 18 人もユンヌフトゥバ劇がある程度以上理解できたことが推測できる。与論出身者 69 人のうち 62 人 (90%) が劇の内容をある程度以上理解できたと分析できる。与論町出身者で劇の内容が「ほとんど理解できなかった」「まったくわからなかった」と回答した者またはそのように推測できる者 7 人のうち 18 人が 18

質問 8 (今回のようなユンヌフトゥバ劇の上演はユンヌフトゥバの保存や継承に効果があると思いますか?)に対する回答の割合を図 6 に示した。選択肢は、1 (強くそう思う)、2 (まあそう思う)、3 (あるかもしれない)、4 (ほとんどそう思わない)、5 (まったくそう思わない)の5つであった。なお選択肢4または5で回答した者はいなかったので、図 6 はこの二つの項目は含んでいない。項目4は無回答者の割合である。

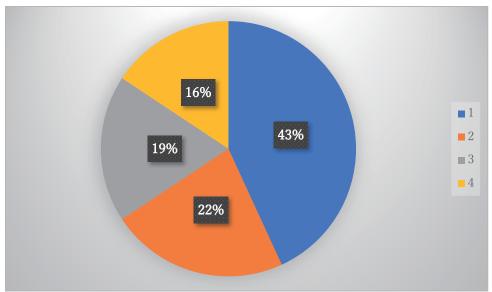


図 6 ユンヌフトゥバ劇はユンヌフトゥバの保存継承に効果があるか。

「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は 65%で、19%が「(効果が) あるかもしれない」と答えている。回答者を与論町出身者 69 人 (無回答者 12 人を含む) にしぼると、強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は 67% (46 人) であった。図 6で「(効果が) あるかもしれない」と答えた 19%の回答者のうち 11 人が与論町出身者であった。

表1に質問8に対して「強くそう思う」「まあそう思う」という二つの回答の理由(自由記述)を列挙した。「効果がある」と回答した理由としては、「残りやすい形式だから」「楽しみながら方言を習ったり、きいたりできるので出演者やみる方も方言を覚えたいと思うのではないか」「耳にする、口にすることで、言葉は生き続けると思います。」「方言を劇で伝える事で分かりやすいものになったと思う。」「方言に親しむきっかけとしてとていいと思います。」「若い世代が話すことで、同世代の人も興味がでてくると思います。」「ユンヌフトゥバを使える場があることは保存・継承に大きく関係があると考えるから。」「使う場の一つとして、会話の形になっている、演劇は使ってみるきっかけ作りとして有効であるから。」「格好よく見える仕掛けとなることもよい。」などがあげられている。一方、「伝説の保存継承には効果大だと思うが、与論の方言そのものの保存・継承につながるかどうかは疑問である。」という記述もあった。また、観客としては台詞がユンヌフトゥバと日本語の「二言語」になっていることで劇の内容が理解しやすかったという記述が複数あった。劇の効果ではないが、「今伝承していかないと消滅する」「島独特の文化であり守り伝えていく義務があると思う。」という記述など、文化継承のために言語を継承することが重要であることが述べられていた。

1	すごい完成度で感動しました。
2	ユンヌフトゥバを将来も伝承してほしいから。
3	残りやすい形式だから。
4	私達の小中のころ学校でヨロン言葉を使ったらバツ当番させられ、今世界も 英語へと進んでいます。世界も複雑になりヨロン言葉が役にたつのではない かと思います。
5	子供も興味を持てる内容で与論に伝わる伝説も方言と同時に伝えることができてよかったと思う。

6	①少し会話が早い。・・・理解する前に大きな言葉で会場の方に発音がハッキリ聞けるようにしたら理解できるかな!! ②島出身である以上方言は理解
	し取組が全員が欲しい!!③島内の史跡めぐり含めて!!
7	とてもよかったです。ありがとうございました。
<u> </u>	
8	今伝承していかないと消滅する。島独特の文化であり守り伝えていく義務が
	あると思う。島の人達だけで話しができるって素敵じゃない。
9	マイクが聞きづらかったが、内容は以前から聞いていたので理解は出来た。
	方言は家庭の中で必ず使う習慣づけることによって自然に覚え、話す事がで
	きると思う。
	子育て世代の親たちが方言を知らない、話せないから、ムリかもと思った。
10	親世代に方言を覚えてほしいと思う。
11	音楽が1体となってとてもよかったです。みいしいく とうとうがなし!
	感激感激でした。世界観に吸い込まれそうで、のめり込んで見入ってしまい
	ました。音楽、照明、演者の方々の演技がとてもすばらしかったです。脚本
	もとてもすばらしかったです。改めてヨロンはすてきな所だなと思いまし
12	た。それを代表するユンヌフトゥバがこれからもずっとずっと続いていくこ
	とが大切な文化を守ることだと思いました。ユンヌフトゥバは聞くととても
	美しい響きでうるわしくすてきだと思います。私は嫁に来た身ですが、本日
	の劇を通してあらためてステキな言葉たちだと思いました。感動しました。
	ミッシークトートゥガナシ
1.0	方言ばかりでなく標準語での説明もあり、説明のしかたもとても自然でとて
13	もよかったし分かりやすかったと思います。素晴らしい劇をありがとうござ
	いました。
14	楽しみながら方言を習ったり、きいたりできるので出演者やみる方も方言を
	覚えたいと思うのではないかと思いました。またあれば見にいきます。
15	今日の劇に大変感銘を受けたので。ありがとうございました。感動しました。
1.6	皆人にわかりやすくヨロンの人に親しみある題材でユンヌフトゥバの継承に
16	大いに役に立つと思う。
	これを機に子供達にもっと方言に興味をもってほしいと思いました。私も子
17	供に方言を使わせなきゃなー!!
	子供の頃あれほぼ使っていた方言が永年使わないことで、忘れてしまいがち
18	です。耳にする、口にすることで、言葉は生き続けると思います。自ら使い
	くり。ヰにりる、口にりることで、音楽は生さ続けると心がより。自ら使い   子供に伝えることを考えていきたいです。今回のような劇として、見て聞く
10	
	ことで興味も湧き、使うようになると思います。楽しい劇でした。とーとう
	がなし。
19	本格的な劇で言葉を理解しようとしている自分がいました。とってもとって
13	も素晴らしかったです。毎年やって欲しいです。感動です。
20	すばらしい伝統は残さないと強く思える作品だったから。
21	方言を劇で伝える事で分かりやすいものになったと思う。
	方言のあとに共通語の訳が入るような構成で分かりやすくよかった。意味も
22	分かり興味を示した子も多いと思う。島外出身の方も上手に話していてよか
	一つたと思う。
23	伝説の保存継承には効果大だと思うが、与論の方言そのものの保存・継承に
	つながるかどうかは疑問である。劇は大変すばらしかったし楽しいものでし
	た。有り難うございました。劇冒頭からの生演奏も効果大で大いに盛り上げ
	てくれました。

竹富島で暮らしていたコトがあり、竹富島の祭種取祭に島民全員が役者として参 |加するお父さん、お母さん、兄弟の姿を見て子供たちは自然と種取ごっこをする 24 うちに方言を覚えていたので。遊びの中で覚えることが一番近道と思います。 方言に親しむきっかけとしてとてもいいと思います。劇は今回だけでなく毎 25 年上演してほしいと思います。 若い世代が話すことで、同世代の人も興味がでてくると思います。皆さんの 26 頑張っている姿はすばらしかったです。 子供たちが与論の歴史に興味や関心を持つきっかけとなり、島民が島への愛 着、誇りをもって、これからも与論の発展のためにがんばっていく力になる 27 と思います。 多くの方々に見にきていただいたり、また演じたりすることを通して、文化が継 28 承していくと思うから。すばらしい劇だった。ミッシークトートゥガナシ!! 現代語でみるより心に響くような気がしました。言葉がわからなくても、劇 29 |の中でなんとかわかることができ、興味をもつきっかけになるとおもったか らです。感動しました。 | ふるさとの文化を大切にしてほしい。 わからなかった言葉を知りたい気持ちが強まるので。とてもすてきな劇でし 31 た。1時間あっという間でした。按司根津伝説の中身は知らなかったので、 分かりやすくてよかったです。 地元の方々が一生けん命方言を使いながら演じてくださっていてその気持ち 32 | が楽しい劇となり見ている方々の心を動かしたと思います。きっと方言って いいなと思ったと思います。 劇を通すことで関心をもって親しむことができる。 (心温まる言葉であると思う) ユンヌフトゥバは使うことが難しい (年上の 方に使う言葉など相手によって使い分ける言葉)なので、耳にすることで少 35 しでも親しむことから入れるとよいと思う。 BGMもあってすごく興味がわく内容だった 36 使う場の一つとして、会話の形になっている、演劇は使ってみるきっかけ作 37 りとして有効であるから。格好よく見える仕掛けとなることもよい。 今回の様な伝説風の劇を文化祭のときやってほしいと思います。今回分かり 易く楽しかったです。方言の劇すばらしかったです。 言葉は用いる機会が無いと失われると思うため。 39 方言を見直すきっかけになると思う。方言は与論にかぎらず大事に守り伝えて 40 いくべきものと思います。また観光資源としても大事にしてもらいたい。 ユンヌフトゥバを使える場があることは保存・継承に大きく関係があると考 41 えるから。

表1 質問8に対する回答の理由

## 3. おわりに

アンケート結果からわかることは、回答者の多くがユンヌフトゥバ劇の公演を肯定的に見ている。劇を観に来るということじたいが、ことばに関心があることを示しているが、このような関心が持続され、より多くの町民が関心を持つようになるためにはユンヌフトゥバ劇の上演を続けることが望まれる。質問9の回答には「劇をつづけてほしい」という記述もあった。劇は演者にとっては、ユンヌフトゥバを聞いて・話す場であり、観客にとっては聞く場である。このような場が、ことばを見直す契機となり、それがことばと文化の継承を意識することにつながるのである。